

## 鎚木先生の思い出

堀 源一郎 (天文学教室)

本学名誉教授鎚木政岐先生が昨年12月27日におなくなりになった。享年85歳であった。

先生は石川県金沢の高名な神官の家柄の出である。大正15年に東京帝国大学理学部天文学科を卒業され、引き続き理学部助手兼東京天文台技手に就任、助教授を経て昭和21年教授となられた。以後昭和38年に定年御退官になるまで37年の長きにわたって、理学部において研究、教育、行政に御尽力になった。

天文学教室の歴史において戦後の最大のイベントは、昭和35年に、旧東京天文台跡地麻布飯倉の土地（と木造バラック式家屋）を手離して、理学部の本拠地に移転したことである。麻布の土地の代償は理学部3号館となった。この移転を決断して陣頭指揮をとられたのが鎚木先生であった。

先生の御専門は天文学の中でも恒星天文学といわれる分野で、銀河回転や恒星運動の非対称流など、当時の恒星天文学の研究における世界の潮流に着目してこれを摂取推進し、わが国における恒星天文学の開拓者となられた。先生の専門分野の著作には多数の論文の他に『宇宙構造論』（岩波講座物理学Ⅷ.C. 昭和14年）があり、当時のこの分野の唯一の文献であった。

このように御専門は恒星天文学であるが、新制大学発足時は未だ恒星天文学という講義科目が無かった時代で、先生は天文学第二講座を担当されて球面天文学（1年4単位）と実地天文学（半年2単位）を講義された。

筆者は、新制大学第1期生として昭和26年4月に天文学科（当時は物理学科天文課程）に進学し、麻布飯倉の理学部天文学教室において初めて聴講したのがこの球面天文学であり実地天文学であった。太陽はお天道さま、月や星はお月さまとお星

さまになって、なかなかにうるおいのある名講義であった。

実地天文学の講義では、天体望遠鏡の鏡筒は自分自身の重さで屈曲しているものと思え、と聴かされびっくりした。その他にも、子午儀の垂直度盛環の軸は環の中心を通っているはずがなく、環は円であるはずがなく、目盛は一樣に刻まれているはずがなく、軸受のボールベアリングは球であるはずがない、と思うことを学んだ。これらの講義の内容は『応用天文文学』（河出書房、昭和26年）にその片鱗を伺うことができるが、その名調子を偲ぶことはできない。

昭和28年には新制大学院が発足し、先生は今度は恒星天文学と位置天文学の講義を担当された。大学院修士課程の学生は3名だったので、聴講が2名になることはよくあったし1名になることも時にあった。先生の講義は大学院になってもお天道さま、お月さま、お星さまの名調子は変らなかつたし、さらに学生が1名でも皆さんは……と語りかけられたのが印象に残っている。

先生は古武士を偲ばせる豪放磊落なお人柄でありながら、案外と細かに気を配られて、温情豊かに学生にも接せられた。筆者はその昔典型的な貧乏学生であって、学会への旅費もまゝならぬことを見通されてであろうが、何気なく、先生の講演の資料などを運ぶアルバイトにかこつけてポケットマネーを出してくださったこともあった。

そういう先生の周囲にはおのずから人が集まって、恒星天文学の研究者集団がつくられた。この研究集団はSAMと愛称された。“来る者は拒まず去る者は追わず”という先生の主義であったが、去る者は皆無で、恒星天文学の分野を離れて多数の研究者がSAMに参加した。夏の研究会がSA

Mの年中行事であり、或るときは妙高高原池の平で、また或るときは信州菅平高原で行なわれた。先生を中心とした集会は懐しい思い出として残っているが、東京天文台木曾観測所のシュミット望遠鏡の構想がSAMの中で萌芽したことを記したい。このシュミット望遠鏡が、東京天文台の改組に伴って理学部所属となることを思うと感激ひ

としおである。

実は昨年12月27日のその日、先生がおなくなりになる数時間前に、吉祥寺の病院に先生をお見舞いに伺ったときには、案外にお元気そうな先生であつたので少しく安心してお別れした矢先に、先生の訃報に接して全く信じられない気持であつた。謹んで先生の御冥福をお祈りいたします。

